

ティエールの『^{かつら}鬢の歴史』

講師（西洋服装史） 斎藤多香子

太陽王と呼ばれたルイ14世は、一日に幾度、鏡をのぞきこんだことだろう。そして、王を取巻く貴族たちにしても、美しい上着や半ズボンばかりでなく、顔をひきたてるよう考慮された鬢のカールの具合、グレーや金色・銀色の髪粉のかかり具合、気になっていたことは数多くあったにちがいない。あげくの果ては、教会に携わる聖職者たちにしても同様に…と、この本をひもときつつ想像はひろがっていく。今回取上げた本は、ジャン・バプチスト・ティエール（Jean-Baptiste THIERS）の著した『鬢の歴史 聖職者の鬢の起源、使用法、形、濫用、規律違反について』

（*Histoire des Perruques où l'on fait voir leur origine, leur usage, leur forme, l'abus & irrégularité de celles des Ecclésiastiques*, Avignon, Louis Chameau, 1777. (383.2-T)）

である。著者ティエールは、生没年は不明だが、この本を執筆しおえたと考えられる1689年当時、パリの南西約100キロのシャンブロンという町で主任司祭を務め、神学博士の資格を持っていたことがこの本に明記されている。

ところで執筆年であるが、クザン Louis Cousin (1627-1707) による1689年の推薦文が付されており、また本文中には1685年の事例も挙げられていることから、1685-1689年にかけてと推察されるが、この文献自体には初刷年が示されていない。リッパーハイテの文献目録によると、1690年にパリで出版、とされている。ついて1702年にはイタリア語版、1712年にはフランク

ルトでドイツ語版が出版されたことも明らかにされている。当館所蔵本には1777年、アヴィニオンとあるので、約90年後の再版本ということになる。イタリア語、ドイツ語にあいついで翻訳され、約90年ののちに版が重ねられたことを考慮すると、この文献は聖職者たちにとって、一種の規範書として需要が多かったのではないかと察せられる。1680年代といえは、ルイ14世親政が始まって20年余りが過ぎ、王はカトリック教会と強く結んで政権を掌握していた時代である。教会内での儀礼華美の風を強く批判する警告の書ともいいうる本書は、「この書物に書かれてあることの中になんらカトリックの信仰にそむくものはない」という推薦文を載けて出版された。聖職者たちにはかなり物議を呼んだ文献であったのかもしれない。

さて、本書は全部で24章からなっている。1・2章は世俗の人々と聖職者とりまぜての古代から17世紀当時に至る鬢の使用について、数多くのラテン語文献から例を引きつつ説明がなされている。3章から9章までは、キリスト教の伝統や規則に



18世紀の鬢屋の店内風景。b, dは鬢を整えて、eはカールをだすため鬢を暖めているところ。（ティドロ他編の百科全書より）

基づいて、聖職者が鬘を用いることは大きな誤りであること、10章から22章までは、鬘使用がいかに“スキャンダル”で聖職者としての慎しみに反することであるかが、義憤やるかたない、といった文体で記されている。23章は鬘を用いている聖職者は宗教上有罪であることについて質疑応答形式での説明、24章では、鬘使用を止めさせるための方法が述べられている。

鬘使用についての概説史ともいえる1・2章の、特に古代の部分の例証は史料も十分とはいえず心もとないものの、著者の生きていた17世紀の状況に関しては興味深い記述が見られる。フランスの王たちは、鬘など使用していなかったのに（たとえば、禿頭王といわれた Charles le Chauve ですら鬘使用の記録は見あたらない、と説明がある）、ルイ13世は初めてふさふさとした大きい髪型を好みこれを用いたため、宮廷内には1629年頃より鬘使用の習慣がひろまっていったこと、特に赤褐色の髪の人たちは、裏切り者のユダがこの髪の色だったと信じられていることより皆に恐怖をひきおこすので、その赤褐色を隠すために鬘を用いたこと、さらにルイ14世の治世ともなると、王と臣下ばかりではなく、ダンス教師や喜劇役者、貴族の下僕までもが着用及び、1659年より鬘職人の数が急速に増加したこと、その習慣は1660年頃から聖職者にまでもひろがってきたことが、この文献によって理解される(pp. 18-28)。

また、当時使用されていたさまざまな鬘も記され、大きい鬘、小さい鬘、小円帽に髪を縫いとめた鬘、一歳子羊の毛のようにふさふさした髪の鬘、髪粉をふって色づけした鬘、香りづけをした鬘などが男性の頭を飾っていたことが読みとられる。

いずれにせよ、聖職者の鬘使用は、教理に反することであり、罪深く反道徳的でなんとか中止させようという著者の意図は明瞭である。「鬘を用いるなんて外見の格好よさのためだけで、頭の形をよく見せたいためだけだ。つまり、自己愛の強さを物語ることでしかない。……だいたい祈りの際、蠟燭の火でも鬘に燃え移ったら大変じゃないか」と、一所懸命、その理由を示している (pp.

329-330)。逆に考えると、当時のカトリックの聖職者たちがいかに自分を美しい姿に見せることに躍起となっていたかが、この史料には如実に語られているともいえる。

角度を変えて捉えると、ミトラや^{オミユス}聖務腕章、^{キャップ}頭巾などの宗教服に付随する装飾品についての歴史的考察もあり (pp. 43-114)、カトリックの宗教儀礼研究にも欠かせぬ一冊である。勿論、髪型の歴史を調べる上で重要文献であることは論をまたない。

ともあれ、ルイ14世のヴェルサイユ宮廷華やかなりし頃、カトリックの聖職者たちの多くは虚飾の誘いに負けて、こっそり鏡におかたて鬘の具合を案じていたのであろう。



CHAP. XXII

鬘職人が、鬘に髪粉をふっているところ。(メルシエのタブロー・ド・パリ)の図版説明本(1787年)より。]